



Title	人と環境のハーモニー
Author(s)	土田, 忠文
Citation	大阪公衆衛生. 1980, 43, p. 14-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84032
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人と環境のハーモニー

大阪市天王寺保健所長
土田 忠文

今年の夏は涼しい夏であった。例年わが街大阪の夏は温度、湿度ともに相当なもので、不快指数云々の新聞記事を肌で感じつつ読むのが常であるのに、今年はそのような日は稀であった。

人体には快的な夏であったが、農作物への影響は芳しくないようである。「いのち」はその環境と深いかわりあいをもつのは言うまでもないことである。

人、この不思議な能力をもつ生物は、長寿と幸福を求めて健康を阻害する因子と斗い、調和し今日に至った。それは時には伝染性病原菌との斗いであり、大気や水の状態の配慮であったりした。

今、わが国の平均寿命は男73.46才、女78.89才となり、世界の最長寿国である。しかし国民死因の上位3傑である脳血管の疾患、悪性新生物、心疾患は死亡全体の61%を占めている。

さて、脳血管の疾患と心疾患は「いのち」をとりまく生活時間環境をどのようにととのえるかということで、改善できる疾病である。人はその人の生きてきたようにしか死ねないとすると、1日24時間をどのように生きてゆくかということになる。

眠ること、食べること、運動すること、身体とその姿勢のありかた、生きざまのなかでの心のすがたがどのように調和安定を保ち、リズムカルな日暮しをしているか等々である。

人はそれぞれの限られた時間と、空間のなかで一生涯を経験する。時の流れは一方通行で非可逆的である。

今をどう生きるかが大切である。すこやかさは、人の一日の生活のなかからとらえられねばならないのである。

現代の日本人はおおむね栄養のとりすぎ、食塩中毒ぎみ、運動不足ぎみであり、心が真の安定調和からはずれぎみなのではないかと想われる。呼吸を調べ、食を調べ、身を調べ、心を調えることが健康の根元である。

しかし、寿命がのびたと言っても、死ぬことを忘れていてもみんな死ぬ。

「いろいろに浮世のしなはかわれども死ぬるひとつはかわらざりけり、また、今までは他人のことかと思ひしに己れが死ぬとはこいつたまらん、という昔の歌にあるように、今この文を読んでいる人も100年後には全部この世には存在しないことも事実である。

自然科学、生物学などのなかで人が如何なる場を占めているかということ、あきらかに見ることにより、とらわれのない、さわやかな、いきいきとした、やすらぎのある、すこやかな生活があるのである。

科学、医学をよりどころとする公衆衛生もその時、光を發し、人を幸せにする輝く道として限りなく、広がってゆくことであろう。公衆衛生は人と環境のハーモニーのなかで、人びとを幸せにする道なのである。

